

## 【中学校第1学年の実践】

### 1 主題名

郷土の文化を受け継ぐ 【C 郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度】

### 2 教材

魂の故郷～本当のアイヌ文化を残したい～ 知里 真志保(北海道版道徳教材(中学校用))

### 3 主題設定の理由【指導観】

#### (1) ねらいとする道徳的価値について【価値観】

郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度とは、郷土によって育まれてきた伝統と文化に触れ、そのよさに気付き、郷土に対する誇りや愛着をもつこと、社会に尽くした先人や高齢者などの先達に対する尊敬の念や感謝の気持ちを深め、郷土に対して主体的に関わろうとする心や、地域社会をよりよいものに発展させていこうとする自覚をもつことであり、ねらいとする価値に迫るためには、これらについて考えを深めさせる指導が大切である。

第1学年の指導においては、小学校の段階における「我が国や郷土の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、国や郷土を愛する心をもつことの学習」を基に、地域の人々との人間関係を問い直したり、地域社会の実態を把握させたりして、郷土を愛し、郷土のために自分ができることは何かを考えさせることを通して、進んで郷土の発展に努めようとする実践意欲と態度を育てていきたい。

#### (2) 生徒の実態【生徒観】

郷土を愛し、郷土のために自分ができることは何かを考え、進んで郷土の発展に努めようとする実践意欲と態度を育てるために、道徳の時間(H31からは道徳科)以外では、次のような指導を行っている。

##### ①社会歴史的分野「近世の日本」、「近代の日本と世界」

北海道開拓の歴史やアイヌの人たちの歴史や文化についての学習を通して、これからの自分たちの郷土はどうあるべきかを考えさせるなど、郷土を愛する心や郷土の発展に努めようとする態度について指導してきた。

##### ②総合的な学習の時間「身近な社会を発見し地域を知る学習」

「自然体験学習」や「地場産業体験学習」等の体験的な学習を通して、地域の自然・産業・生活の実態を把握し、地域の環境を守るために何ができるのかについて、生徒が地域における自己の生き方との関わりで考えられるよう指導してきた。

##### ③家庭や地域との連携

本教材を活用した学習の様子を道徳通信や学級通信に掲載し家庭に伝えるとともに、家庭で郷土を愛する思いについて話し合う機会を設けることで、自分たちの郷土や地域のために何ができるかを考え、できることを取り組んでいこうとする意欲を高める指導を行っていく。

学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育で、生徒は、郷土を愛する気持ちを一層強くもち、郷土のために何ができるかを自分との関わりで考える姿が見られるが、より広い視野から地域との関わりについて多面的・多角的に考え、進んで郷土の発展に努めようとする実践意欲と態度について道徳科で育む必要がある。

### (3) 教材について【教材観】

郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する大切さについて、多面的・多角的に考えさせるために、アイヌ文化を守るために強く生きた知里真志保の生き方を中心に話し合い、価値理解・人間理解・他者理解を深めさせるとともに、郷土のために自分ができることは何かについて、生徒の実態に応じた地域資料を活用し、進んで郷土の発展に努めようとする態度を育てる。本時においては、中心的な発問とそれを効果的にするための基本発問を次のとおり設定する。

#### 1 「◎中心的な発問」の場面

→郷土の伝統や文化を守るために生き抜いた真志保の生き方から道徳的価値について多面的・多角的に考えさせる。

◆意 図：アイヌの伝統や文化を正しく後世に伝えるために、強く生き抜いた真志保の生き方について考えさせ、価値理解・他者理解を深めさせたい。その際、登場人物や人間関係を構造的に板書で整理しながら、真志保の生き方について立場や視点を変えて、多面的・多角的に考えることができるようにする。

●真志保の思い：アイヌ文化を正しく伝えるために、自分のできることはやり通す強い思い。

#### 2 「○基本発問」の場面

→真志保のアイヌ語研究に対する思いから郷土への強い思いについて考えさせる。

◆意 図：「内側からアイヌ語をやるのだ。生活のニュアンスまで分かるアイヌ語を」や「いま俺がやらなければ、それは永遠に正しくされない」との言葉から、真志保のアイヌ語研究への強い思いについて考えさせたい。その際、事前学習として、生徒に教材を提示し、「真志保と他のアイヌ語研究者の違いは何か」等、読む視点を示して読ませることで、ねらいとする道徳的価値について、考えを深められるようにする。

●真志保の思い：アイヌ文化が間違った形で後世に残ることを危惧し、正しく伝えることができるのは自分しかいないという郷土への強い思い。

#### 3 「地域素材の活用」

→身近な地域素材から自分たちの生き方を考えさせる。

◆意 図：小学校の段階における「我が国や郷土の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、国や郷土を愛する心をもつことの学習」を基に、地域の人々との人間関係を問い直したり、地域社会の実態を把握させたりするために、地域の歴史や伝統、先人の願いについて記された地域資料を活用し、郷土のために自分ができることを考えられるようにする。

#### 4 ねらい

知里真志保の生き方に触れることを通して、郷土の伝統や文化を尊重することの大切さや、郷土のために自分ができることについて考え、郷土を愛し、進んで郷土の発展に努めようとする実践意欲と態度を育てる。

#### 5 学習指導過程

	●学習活動 ○主な発問 ◎中心的な発問 ・子どもの反応	・指導上の留意点 ■評価	「考え、議論する道徳」 に向けた工夫
導入	● 真志保が大切にしたいアイヌの人たちの伝統や文化について考える。 ○ アイヌの人たちが大切にしていたことは何だと思うか。 ・よいことをするとよいことが返ってくる。 ・自然や動物を大切にすること。	・導入において、アイヌ民話を読み、ねらいとする道徳的価値への方向付けをする。	<b>【工夫①】</b> ・アイヌ民話を補助教材として活用し、本教材の理解を深めるとともに、アイヌの人たちが大切にしていた文化について想起させる。
展開	● 教材「魂の故郷」を読み、話し合う。 ○ 真志保は、どのような思いで、アイヌ語の研究をしていたのだろうか。 ・他の学者はアイヌ文化を外側からしか見ていない。 ・このままでは、アイヌ文化が失われてしまう。 ・アイヌ文化を守る人は自分しかいない。 ◎ 真志保の生き方から、学んだことは何だろうか。 ・郷土の伝統や文化を本当に大切にしていたこと。 ・アイヌ文化を正しく伝えるために、自分にできることをやり通す強い思い。 ・正しく知ってもらうために、伝えることの大切さ。	・アイヌの人たちの歴史や文化を正しく伝えるために、信念を貫く真志保の強い生き方から、人間理解を深めさせる。 ・真志保の生き方について、多面的・多角的に話し合い、価値理解、他者理解を深めさせる。	<b>【工夫②】</b> ・事前学習として、生徒に本教材を読ませる。その際に、「真志保と他のアイヌ語研究者の違いは何か」という読む視点を示すことで、ねらいとする道徳的価値について考えを深められるようにする。 <b>【工夫③】</b> ・板書で人間関係を構造的に整理したり、生徒の考えを分類して示したりしながら、知里真志保の思いや生き方について多面的・多角的に考えを深められるようにする。
開	● 自己を見つめる。 ● 地域資料「三樹の教え」を示し、自分たちの故郷について考える。 ○ よりよい郷土にしていくために、私たちにできることは何だろうか。 ・もっと、地域の歴史や文化を知り、大切にしていきたい。 ・地域のよさをたくさんの人に知ってもらいたいので、いろいろな方法で発信していきたい。 ・これからも、地域の人たちと互いに助け合ったり、協力したりしていきたい。	・郷土のために自分ができることは何かについて、生徒の身近な地域素材を活用して考えさせることで、これまでの自分の地域に対する考え方を振り返り、自己理解につなげていく。 ■ 郷土の文化を受け継ぎ、進んで郷土の発展に努める大切さについて、自分との関わりで考えを深めることができたか。	<b>【工夫④】</b> ・生徒の身近な地域資料を読んだ後に郷土について考えることにより、ねらいとする道徳的価値について自分との関わりで捉え、自己理解を深められるようにする。
終末	教師の説話を聞く ※地域の人たちの歴史や文化を知ることによって、一層郷土への愛着が深まっていくことについて話をする。	・本時の授業を振り返りながら、郷土を大切にしようとする実践意欲が高まるようにする。	<b>【工夫⑤】</b> ・教師が自ら説話を行うにより、生徒の心情に訴え、ねらいとする道徳的価値を生徒が一層主体的に捉えることができるようにする。

6 板書



7 ノート・ワークシート（地域資料）

### 洞 爺 「三樹の教え」

洞爺中学校校歌の一節にある「三樹の教え」とは、どのような教えなのか?

現在の香川県から旧洞爺村に初めて開拓の鉄が下ろされたのは明治20年5月のことでした。その年も次の年も早霜のため、ほとんど収穫がなく、ここでの生活が困難になり、洞爺を離れることを考える開拓者が多くなり、開拓団がバラバラになろうとしていました。

そのことを心配した移住団主・三橋政之は、桑と桜と柁の木が同じ箇所から互いに根を抱き合っていて三樹の下に団員たちを集め、涙を流して説得したそうです。

**「三樹が抱き合って共に栄え繁っているように、我々もお互いに助け合って、この困難な時期を乗り越えていかなければならない」**

三橋政之の説得に団員たちは心を動かされ、みな未来を信じて突き進むことを決意しました。

その後、洞爺の開拓はどんどん進み、北海道でも有数の農業地域となりました。これが三樹にまつわる物語として語り継がれてきた「三樹の教え」です。

美味しい食材の宝庫で自然の豊かな村として発展し、現在に至っています。



【春の老三樹】



【夏の老三樹】

【名木「老三樹」】 ●場所／洞爺水の駅から徒歩5分 ●推定樹齢／桑（クワ）1340年、桜（サクラ）640年、柁（セン）240年

**【授業実践を振り返って】**

アイヌの人たちの歴史・文化等について理解を深め、真志保が郷土に対してどのような思いをもっていたかに気付かせながら、自分たちの郷土の伝統と文化を守り、郷土を愛する態度について、自分との関わりで深く考えることができるよう、構造的な板書で登場人物の関係や願いを整理したり、地域資料を活用したりするなどの工夫を図りました。

生徒は、郷土に対する思いをもち、対話的に学習を進めながら、

- ・アイヌの人たちの立場に立って、その歴史や文化を大切にしたい。（相互理解）
- ・真志保はアイヌ文化を正しく守ることは自分の使命のように感じていた。（真理の探究）
- ・郷土の先人に感謝し、地域のために自分にできることを行っていきたい。（社会参画）

などの道徳的価値との関連を図りながら自分との関わりで多面的・多角的に考え、「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」について、考えを深めることができました。